



Title	甲午農民戦争の人類学的解釈(下)
Author(s)	土佐, 昌樹
Citation	年報人間科学. 1990, 11, p. 39-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8273">https://doi.org/10.18910/8273</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学人間科学部 〔一九九〇年三月〕

『年報人間科学』第十一号 三九頁―五九頁

# 甲午農民戦争の人類学的解釈(下)

土 佐 昌 樹

## 甲午農民戦争の人類学的解釈 (下)

### 三、甲午農民戦争の過程

#### a. 古阜民乱から全州陥落まで

出来事は、それ自体として存在する客観的なモノではなく、解釈の視点を移すのにしたが、幾重にも変貌する無数の過程の交錯である。さらに、解釈は、出来事を取り巻くさまざまな構造的対立のセット（たとえば、常民と両班、農民と国家、東学と儒教的イデオロギー、一九世紀末の世界システムと朝鮮半島の地政学的意味など）によって制限されているが、それはまた、解釈者の採用する意味論的枠組み（たとえば、戦争や革命という概念に与える自由度）によっても拘束されている。一八九四年の朝鮮半島は「何か」が起きてもおかしくない状況にあった。しかし、実際に「何が」起きたかを記述することは容易でない。見聞記や回顧録の断片、政府側の報告資料、日本の新聞記事、こういったものをいくら寄せ集め、つなぎ合わせたとしても、「全体」を鳥瞰する超越的視点が保証されるわけではない。それは、よくも悪くも、解釈の統合体という意味でのフィクションにはかならない。だとしたら、目指すは唯一の真なる「歴史」を書くことではなく、解釈の多義性を許すような形式に細部を組織することであろう。

一八九四年（甲午の年）二月十五日（旧曆正月十日）、全琿準

らは、千余名の農民を指揮して、古阜郡の官衙を襲い、占拠した。

これが甲午農民戦争の発火点となった古阜民乱である。当時の古阜郡守は、典型的な「貧官汚吏」として知られる趙秉甲<sup>チョウ・ビョンガ</sup>であった。

彼は、万石沢（沢とは灌漑のために流水に堰堤を築いた施設）と八旺里沢という新しい沢をつくるために農民を賦役に狩りだし、さらにその沢に対する高い水利税を徴収したり、湖南（全羅道）転運使（地方の税米をソウルに輸送する官職）の趙弼永<sup>チョウ・ビョルウ</sup>と結託し、税米の不足分を農民から再徴収したりして、考えつく限りの名目で私腹をこやし、農民たちの怒りを買った。

全琿準は全羅道泰仁郡に生まれ、郷班出身の父をもつ没落両班であった。彼の父は古阜郡守によって一八九二年頃に殺害されたといわれ、全琿準は喪服を着て戦争に参加した<sup>(1)</sup>。父の死の直後に東学に入教した全琿準は、農民の信望を得つつ、古阜地方の接主の地位を利用して、計画的に乱を起こすつもりであったらしい。彼は、古阜民乱の前年に二回、郡守に対して連名陳情をおこなったが効果なく、ついに蜂起する決心をした。古阜民乱を目撃した一日本人は、その時の模様を次のように書き残している。

「旧曆正月」十日、鷄鳴を待て東津江頭に勢揃ひをなしたる民

軍は、何れも白木綿を以て頭部を纏い、長さ五尺有余の竹槍を携へたり。最初集まりたるものは凡そ五百人計りなりし、而して首領以下皆徒歩せり。城府の関門難なく通過し、朝堂と称する郡守の事務を執る所の前面に出たり。寝所を冒し進んで内部の諸衛を突き、捜索周密、而して夜来未だ明けず、豎子「郡守趙秉甲のこと」已に逸し追ふに方角なし。先づ京路を追蹤す。及ばず、午時反対の方角井邑の辺に遁れたるを知れり。首領（七名中重なるものは全某、他は未だ詳ならず）先づ朝堂に入り、使をして吏部其他重なる悪政の助力者を喚ぶ、来らざるものは捉捕す。陣宮整肅号令明晰、他の席旗軍に似すと云ふ。先づ悪政の始末を嚴重に取調ぶる為め毎日拘留の面々を鞫問す。陣宮は府の内外にあり、皆幔幕を連ね、夜は篝火を焚き、糧は敵に依る。彼の堰堤報酬「水利税のこと」として取溜め居たる窺千四百有余石は劈頭に彼等の用に供せられたり。

十一日、十二日、十三日、十四日、加盟する村落十有五個、全軍一万余人、先づ壮丁を抜き、老少は帰へし、之を統ぶるもの每村五名、隣郡到处同情を表し、概して悪評を加ふるものなし。然れども亦進んで之に合し自己が頭上の悪政を払はんと欲するものなし(2)。

郡守には逃げられたが、「貧官汚吏」に懲罰を加え、収奪された財を奪回するという展開に民衆は狂喜し、祝祭的な熱狂状態が見ら

れた。同じ見聞録には次のように書かれている。

爾後の状況によれば、民軍は互に交代して人員に減少を見ざるのみならず、竹槍を執て三々五々相往来するもの絶ゆることなし。此等のものに就て聞くに、一度び陣宮に入れば殆んど人生別境の如く、家に帰りにて耜鋤を手にするを物憂く思はれて省家の念殆んど絶ゆるものありと云へり。又事の起りしより已に二ヶ月、人員も亦た多数のことなれば、彼の設宮の近傍は自然物売り商估の集合する処となり、飲食店より雜貨店の類俄かに市を作し、甚だ盛なる景況なりと云ふ。大凡その如くなれば日々牛馬を侶とし、隴敵に歳月を送り、嘗て樂事に慣れざる土民の常として日月を忘れて野宮に嬉遊するも亦怪しむに足らざるなり(3)。

この騒ぎはまたたく間に朝鮮全土に広まり、全邊準は方術にだけた不死の英雄だといううわさでもちきりとなり(4)、人々の民俗的想像力をかきたてた。古阜民乱における蜂起者は、十日間ほどで解散したのであるが、いま見たようにその余熱は一向に醒める気配を見せず、勸善懲惡劇の報が伝わるとともに、「東学の根拠地たる忠清・全羅両道が動揺の徴あり、中にも古阜郡に隣接せる泰仁・金溝・井邑・扶安・茂長等各県に於ける東学道徒は乱民と謀を通じ、叛乱の機会を窺って居た。従って古阜郡民乱の査弁は特に慎重な注意を要した」(5)。ところが、政府から事態收拾のために派遣された按察使李谷泰は、一触即発の态势を認識していなかったようで、八

百名の兵卒を率いて現地のにりこむと、すべての責任を農民側に帰し、蜂起した農民を「東学党」として捕縛、殴打し、民家を焼き払

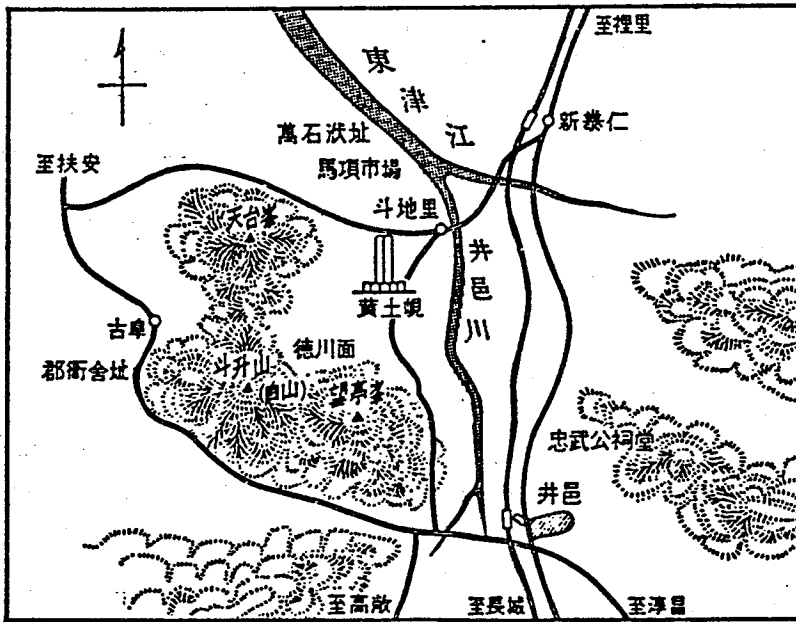


図1 古阜付近の図（呉知泳、前掲書、172頁より）

い、財産を掠奪し、婦女子に暴行を加え、ありとあらゆる乱暴狼藉を尽くして火に油を注ぐことをした。

全琿準は、全羅道を潜行しながら、有力な東学接主であった孫和中、金開南と提携し、武装蜂起の準備を進めていたのだが、四月下旬、全羅道各地の東学接主に蜂起を呼びかける通文を回し、本格的な農民戦争の火ぶたがここに切っておとされた。

全琿準の檄にまず応じたのは古阜郡と泰仁県の東学道徒であった。五月四日、古阜と泰仁の蜂起農民は、古阜郡内にある白山に集結して立て籠った。白山（斗升山）には四千石の税米を収めてある政府の倉庫があり、さらに戦略上の要所でもあった（図一参照）。農民軍はここに「湖南倡儀所」を設け、全琿準を大将に、孫和中、金開南を総管領に選出し、農民軍の指導部を構成した。全琿準は、続々と集結する蜂起農民を農民軍に編成し、戦闘体制を整えた。集結した農民軍は、全琿準の率いる四千名のほかに、孫和中の包から五千名、金開南の包から二千名などゆうに一万名以上を数え、東学教徒を中心に下級吏属や亡命者の合流も見られた。全琿準は、陣所に回文をまわして農民軍の守るべき紀綱を発表した。

- 一つには、人を殺し、物を害する勿れ。
- 二つには、忠孝を全うし、濟世安民せよ。
- 三つには、倭夷を逐滅し、聖道を清めよ。
- 四つには、ソウルに進撃し、権貴を滅せよ。

白山を根拠地とする農民軍は、五月八日になると古阜、泰仁、金溝、扶安一帯の官衙を襲撃し、武器庫より火繩銃、刀槍の類を奪取し、税米倉庫を開いて人民に分け与え、現地の住民の歓迎を受けながら戦列を拡大して行つた。全羅道觀察使金文鉉キム・ムンヒョンは、全州官兵と裨負商（行商人のこと、強固なギルド的組織をもっていた）から成る混成部隊千六百名を出動させるが、農民軍はこれを黄土峙という峠に誘引し、貧弱な武装にも拘らず、七五〇名の戦死者と多数の武器および食料をろ獲する戦果を収めた。いわゆる「黄土峙の戦い」と呼ばれるこの交戦での農民軍の初の凱歌は、農民軍の士気を甚だしく鼓舞し、古阜郡の農民反乱は一変して全羅道全体の反乱となり、朝鮮全土に拡大して行くかの勢いを見せた。「それは黄土峙の戦闘で官兵が大敗して以来、そのうわさが四方八方にいっそうはでに伝えられていったためである。つまり全朝鮮が全璣準の手にかかつていたのであり、世人は東学軍の天下になるだろうと語りあったのであった」(8)。

黄土峙の戦いで大勝利を収めた農民軍は、その日のうちに井邑に進出し、興徳、高敞を経て、五月十三日には茂長県に突入した。茂長県は孫和中の包の根拠地として、東学の一中心を成していたが、そのため地方官憲の東学教徒に対する迫害も激しい所であった。農民軍は官衙をうちこわし、投獄されていた四十余名の東学教徒を釈放し、官吏の大半を殺害した。農民軍は城外の狐山峰に陣を構え、全璣準は、彼自身の執筆によるといわれる次のような倡義文（宣言文）を世に出した。

#### 倡義文

世に人の貴しとされるゆえんは、人倫があるためである。君臣・父子の關係は人倫の最も重要なものである。人君がめぐみ深く、臣下が忠実で、父親がいつくしみ深く、子供が孝行をつくとして、はじめて、国家は安泰の域に入りうるのである。わが聖上は慈愛に富みまた賢明であり、賢く行ないの正しい臣があつてその聡明を助けるならば、堯舜の世、漢の文帝、景帝の世にも比すべき治世を望むこともできよう。しかるに今日の人臣たる者、恩に報いることを知らず、徒らに禄位を盗み、君の聡明をおおいかくすばかりである。忠義によつて君を諫めんとする士を妖言をはく者とし、正道の徒を匪徒よばわりし、京中キョウチュウには国政を助ける人材なく、地方には民を虐げる官吏が多い。人民の心は日々にすさんでゆき、生を樂しむにたる職業・資産を失い、さらには身を保つ保障すらない。虐政は日々につのりゆき、怨みの声の絶ゆることなく、君臣・父子・上下の分がくずれ去つてしまった。いわゆる公卿以下方伯・守令にいたるまで、国家の危機を考えもせず、ただ己れの身を肥やすことにのみ熱心であり、官吏詮衡の門は金もつけの場とのみみなされ、科挙の試験場は売買の市場の如くである。莫大な賄賂は国庫には入らず、ただ個人の私腹を充たすのみであり、国家に積年の債務があつても、これを清算しようとする考えももたず、嬌慢にして奢侈、淫乱で卑しいことのみを恥ずるところもなく行ない、朝鮮八道がその好餌となり、万民が塗炭の苦しみにあえいでいる。守宰が民を虐げ暴利を貪つて、どうして百姓が困

窮しないわけがあるか。百姓は国家の根本である。根本が衰えるなら、国家は必ず亡びるのだ。国を治め民を安じさせる策を考え、ただ一身の利害のみを考え、国家の蓄積を消尽させることが、どうして正しいことであろうか。我等は在野の遺民にすぎないが、王土の上に食い、君の衣を着て生きる者である。どうして、国家の滅亡を坐視するにしのびえようか。朝鮮八域心を同じくし、億兆の衆議により、ここに義旗をかかげ、輔国安民をもって死生の誓いとする。今日の光景に驚くことなく、昇平聖化の世にともに入り、生きてゆくことを望むものである。

甲午正月 日

湖南倡義所

全 璣 準

孫 和 中

金 開 南 等 (9)

この倡義文は、当時一般に感じられていた「憂国の情」を明確に代弁し、読む者の胸を打つ力に溢れている。だが、さしあたって重要な問題は、全璣準の「反封建的」、「反侵略的」な意識がどこまで円熟していたかということではなく、これが一般にどう読まれたのかということであり、全璣準の意図と農民の期待が会う臨界点を探ることである。では、当時の農民は、これをどう読んだのか。

「その通りだ」「よくやった」「天道は果たして無心ではない」

「やつらの世の中をただちに亡ばさなければならぬ」「亡ぶべきものはただちに亡びてしまい、新しい世の中が出現しなければならぬ」と、民心が極度にわきたっているなかで、村ごと家ごとに、顔を合わせればこのような言葉が交わされた。そして「今度の倡義文は『東学党』から出ているそうだが、東学とはいったい何なのか」ということが話題になる。ある者は「東学は西学に対立して出てきたものだ」といい、ある者は「東学は儒道や仏道・仙道が衰えたかわりに現われたものだ」といい、ある者は「東学は仙道によく似ていて、長生不死の法をつかい、天上を飛ぶなど方術が多い」といい、ある者は「朝鮮でははじめて生まれた道であり、将来天下のすべてがこの道に帰するようになるだろう」という。「東学軍のいうことによると、天地は新たに開闢される。東学の道は古今に比類のないものだそうだ。東学軍はよく団結しており、韓信や諸葛孔明のような英雄・豪傑が大勢いるそうだ。将来の世の中は東学軍の世になるだろう」などと、一般の評判はすべて東学に好意的なものようだった(10)。

農民軍の向かう所に敵なしという状態だったが、農民戦争における絶頂期と言ってよいこの時期に、かすかではあるが全璣準の統制を逸脱し、分裂して行く契機が認められる。五月十六日早朝、全璣準率いる農民軍は茂長を斃し、翌日靈光に到着すると郡衙を破壊し、武器を奪うという従来の光景に加え、「民家を掠奪するものが少なくなかった」(11)。二十日に農民軍は、一部は咸平、一部は務安に

南下したが、靈光や茂長の陣中に留る者も少なく、一万余名の農民軍は六、七千名に減少した。しかし、白山を發った頃に比べてかなり武装が強化されたようで、火繩銃、刀槍、竹槍などの原始的な武器であるとはいえ、また大部分の者が武器の扱い方さえ知らなかった状態であったとはいえ、数百名の騎馬を擁し、きらびやかな色の旗を振り翳し、とりつかれたような勢いで進軍を続け、各地で「現実の」勸善懲惡劇を演じてみせた。

一方、政府は閔妃の腹臣洪啓薫<sup>ホンギョクワン</sup>を兩湖（忠清道・全羅道）招討使に任命し、政府軍八百名を仁川から群山に上陸させ、五月十一日に政府軍は全州に入城した。政府軍はアメリカ人教官の訓練を受け、モーゼル銃、クルップ式野砲二門、ガトリング式機關砲二門で装備した精銳部隊であった。ところが、群山から全州に進軍する途上でおぼけづいて逃亡する者が相次ぎ、全州に入城した時には八百名の政府軍は四七〇名に減少していた。洪啓薫は、五月二十日の咸平陥落の報に接してはじめて政府軍を地方兵とともに靈光に進出させたが、士気はあがらなかつた。農民軍は、政府軍を南方におびきよせる一方、長城に進出して政府軍と大激戦を演じた。五月二十七日四千名の農民軍は三百名の先鋒隊をうちやぶり、機關砲二門と多量の彈薬をろ獲した。

黄土時にひき続いて長城の戦闘でも凱歌をあげた農民軍は、ただちに北進し、五月三十一日には全羅道の主府全州に到着し、城内に内応する者がいたせいもあり、ここを無血占領した。李王家の發祥地であり、穀倉地帯の中心をなす全州を占領したことは、極めて重

大な象徴的意味をもつものであった。この時全州に入城した農民軍は、各地に駐留した軍勢を除いて三千余名であった。

#### b. 全州和約と弊政改革案

ここまでの農民軍の軌跡を表現し得る言葉にはただ一つしかないすなわち、「熱狂」である。政府軍上陸の時の雰囲気は次のようなものであった。

郷村の住民は、はたして外国輸入品の殺人器械を目のあたりにして、すっかりたまげてしまった。京軍「政府軍」は数日にして古阜白山に到達し、東学軍はまったく抵抗せず、ただちに部隊をあげて南方に退却した。これをみた官兵は追撃を急いだ<sup>(12)</sup>。

政府軍との衝突を避けながら南方に逃走した農民軍は、かと思ふと政府軍との交戦を挑み、その勢いに乗じて全州まで一気に北進し籠城してしまうが、そこには明確な戦略上のプログラムが欠けている。彼らを支配したのは熱狂に固有のリズムであり、そうした熱狂は、全ての千年王国論的運動がそうであるように、「伝染病が蔓延するような形」<sup>(13)</sup>をとって荒れ狂い、そして静まる。はたして全州城内に立て籠った農民軍は、戦略的に不利な立場に追い込まれることになってしまった。

長城で敗北した洪啓薫の政府軍と地方兵は、農民軍の後を追って全州に達し、五月三十一日、全州をとりまく完山七峰に千五百余名



をもって陣を布いた。ここは李王朝発祥の地として禁山になっていたので農民軍は占拠するのをためらったのであるが、政府軍が高地に野砲、機関砲をすえつけ全州城を見下ろす一方、農民軍は長城戦闘でろ獲した武器の操作法も知らず、窮地に陥った。政府軍が遠距離砲撃を加え、城内にある数千戸の人家を焼き払ったのに対し、農民軍は六月四日と六日の二回にわたって接近戦をとって城外突破をねらったが、約千名の死傷者を出し、退却を余儀なくされた。また、政府軍にも全州城を奪回する余力はなく、両軍は対峙状態にはいつた。

農民軍の全州占領の知らせは政府に大きな衝撃を与え、洪啓薫の「外兵借用」案を採用することに決定し、袁世凱をつうじて清国の出兵を要請した。北洋大臣李鴻章は二鑑の軍艦を仁川に派遣し、六月九日には九百余名、十二日には千五百余名の清軍が忠清道の牙山灣に上陸した。六月七日には天津条約（一八八五年）の協約にしたがい、日本政府に出兵通告を行った。日本政商は、清国から出兵通告を受け取る以前、すでに六月二日には日本軍出兵を決定しており、着々と戦争の準備を進めていた。「日清戦争の開戦は、このとき決定されたといっても過言ではなかった」<sup>(14)</sup>。日本政府は五日に大本営を設置し、広島第五師団に動員令を下し、九日には一時帰国していた大鳥圭介公使が四二〇名の陸戦隊を率いて仁川からソウルに侵入し、さらに約六千名の混成旅団が仁川、ソウル地区を占領した。

こうした措置が体制側により大きな危機を招くであろうことは明

白であった。政府側を代表する洪啓薫らは、とりあえず農民軍と和解して外国軍の撤兵を実現するため、農民軍が提起した「弊政改革案」を無条件で受け入れ、六月十日全州条約が成立した。弊政改革案とは、官軍が撤兵した後に地方官が取るべき新たな行政の方針を定めたものだが、その内容は次のようなものだった。

一、東学道人と政府との間の多年の遺恨を水に流し、庶政に力を合わせる事。

一、貧官汚吏はその罪状を明確にして一々厳罰に付すること。

一、不良な儒林「儒教徒」と両班どもをこらしめる事。

一、奴婢文書を焼却すること。

一、七班賤人「白丁・匠人・妓生・奴婢・僧侶・巫子・占卜・俳優」の待遇を改善し、白丁の頭上の平壤笠「白丁は必ずかぶるように強制されていた」を脱がせること。

一、青春のうちに寡婦となった者の再婚を許すこと。

一、いわれのない雑税は一切実施しないこと。

一、官吏の採用には地方閥を打破し、人材を登用すること。

一、日本人と姦通する者は厳罰に付すること。

一、公私の債務すべて過去のものは一切取り立てぬこと。

一、土地は平均に分作させること<sup>(15)</sup>。

ここに表れているものを、単に「反封建的」、「反侵略的」な主張と見なすのは不充分である。もちろん、彼らの想像力自体が局所

的な客観的可能性の構造に制限されていることは否定できないにせよ、そこにはまた普遍的な「人間性」の発露が見られることも確かなのである。「闇」から発せられた抑圧された者たちの切迫した叫び、あるいは友愛に満ち溢れたコムニタスを希求する激しい衝動、そうした「声」を聞き分けることができなければ、例えば第一条に「封建政府への協力」が示されているから「反封建的性格において、一定の制約をまぬがれることができなかった」<sup>(16)</sup>という一面的評価に陥ってしまうことになる。

講和が成立すると政府軍はソウルに戻り、農民たちはさし迫った農作業のため故郷へ帰って行った。さらに、全羅道内の五十三州（同格の地方行政単位である府・州・郡・県の総数）に農民軍の自治機関である「執綱所」を設立し、弊政改革案に沿った行政を実現しようとした。村ごとに執綱一人と議事員若干名を農民の代表として置き、地方官吏を監視下に置いた。また、全羅道は金溝に本拠地を置いて全羅右道を、金開南は南原に本拠地を置いて全羅左道をそれぞれ統轄した。全羅道内に限られたこととはいえ、農民による自治が試みられ、中央政府の勢力の及ばない独立国家の出現を思わせるような光景が見られたことは、朝鮮史上において画期的な事件であったが、実際の運営はあまりうまくいかなかったようだ。

十二カ条の弊政改革案を移行に移すことは決してなまやさしいことではなかった。一方で官吏の帳簿を検閲しながら一方では人民の訴状を処理し、一方で道を広めることに努めながら一方では

官庁や民間に残されている武器や馬をかり集めて執綱所の護衛軍を編成し、万々に備えた。このころ、全羅道内では青少年にいたるまでほとんどすべての人々が東学の道に入り、「接」を組織するにいたった。このような情勢に乗じて良からぬ者が入りこんでくることも、もちろん少なくなかった。そのためさまざま不道・不法が発生することも免れがたいことだった。このため世人はやかましく東学軍を批評したものだ。「東学軍には貴賤貧富の別がなく、嫡庶奴主の別がなく、内外尊卑の別もない」とか、「東学軍は国家の逆賊、儒道への乱賊、富者にとつての強賊で、両班の仇賊だ」とか、「東学軍の眼中には政府もないのだ」等々。しかし、全羅道の勢力が日増しに盛んになり、東に慶尚一道をゆるがし、北は忠清道・江原道・京畿道・黄海道・平安道にまで広がっていくようになると、朝鮮にはやがて大変化が生じるにちがいないと取りざたされるようになっていった<sup>(17)</sup>。

当時の全羅道で見られた光景は、明らかに倫理的なレベルを超えた動きであり、多種多様な結合・横断を可能にする過剰な生成であった。そうした「自由な場所」こそが、社会運動を支える熱狂を生み出し、同時にその筋骨きを裏切っていくような欲望の奔流の源ともなっているのだから、そこに見られる過程を後代の人間が倫理的な規準で裁いてみせても意味がない。

さて、彼らの「自由」を脅かす者は、いまや政府ではなく日本軍である。全州和約が成立した後、朝鮮政府は日清両軍の同時撤兵を

要求したが、農民軍鎮圧に名を借りて朝鮮を軍事的に制圧し、清国軍との戦争のきっかけを捏造することを狙っていた日本政府は、日清両国による朝鮮の「内政要求」を提議し、これが清国に拒絶されると、単独でもそれを遂行するまで撤兵できないと主張した。さらに、七月二十三日、王宮を占領して親清的な閔氏政権を倒し、開化派の残党による親日政権を出現させていわゆる「甲午改革」を實行させる一方、七月二十五日には清国軍を奇襲して戦闘状態に入り、八月一日にいたって清国に宣戦を布告した。日本軍は十分な準備を整え、計画的に戦争を引き起こしたため、日清戦争の勝敗は意外なほど早くつき、九月中旬に日本の陸軍が平壤で、海軍が黄海で清国に勝つてからは、日本軍は連戦連勝の勢いで進み、戦線は朝鮮最北部から中国東北地域に移っていった。はじめのうち清国の勝利を信じて疑わなかった朝鮮政府の驚きは大変なもので、誰の目にも祖国朝鮮が日本軍による占領の危機に瀕していることは明白であった。この民族的危機に際して立ち上がったのは、またもや全羅道の農民軍であった。

### c. 農民軍の再起から挫折まで

農民軍再起の話が持ち上がるのは十月になってからののだが、これは古阜民乱の時期と同様、農作のリズムと無関係なものではなからう。しかし、彼らは日常的なリズムを維持しながらも、非日常的な集団自殺ともいえるような行為に走る決意を固めた。これまで農民軍の熱狂を保証してきた、「胸に弓之符を貼り、口に二一の呪文

を唱へて居れば造化の靈力で砲弾も当たらず、刃に死せず向かふところ敵なし」<sup>(18)</sup>という宗教的信念は、全く別の「神話」にとりつかれている日本軍には通用せず、近代兵器の前に無惨に朽ち果てることになる。たとえばそれまでの戦闘で見られた次のような情景。

うわさによると、この時の礼山の戦闘では、官軍側の砲口から水がとびだしたことがあったという。それは、その時官軍側の飯たきをしてやっていた老婆が、兵士が眠ってから隙をみて砲口に水を注ぎこんだためだといわれる<sup>(19)</sup>。

またたとえば全州城陥落の時に農民軍に内応した者たち。ろくに武器もたず、また軍事訓練を受けたこともない農民たちが熱にうかれたように進軍を続けることができたのは、彼らの行為の神聖さを信じて裏から支えたそうした大多数の隠れた者たち、あるいは大多数の者たちが共有する同一の文脈が存在したからであり、政府軍でさえその例外ではなかった。それ故、農民軍の勝利を現実化したのはいわば象徴的な力とでも呼べるものであったのだが、全く異質の文脈に身を置く「外部」の集団と戦わねばならなくなったとき、結局は客観的な諸条件の優劣が勝敗を決する決定的な要因となる。そうした趨勢は農民軍の指導者たちにも認識されていたようだが、彼らは再度蜂起する道を選んだ。

十月十、十一日にわたり、農民軍再起に関する会議が全羅道参礼で開かれ、南接の農民軍指導者の主戦論に対し北接の東学上層部の

和平論が対立したが、結局武装蜂起が決定された。宗教的純化を目指す北接と社会運動を指向する南接との対立は、前々から潜在しており、全州占拠の際もこれに呼応しようとした忠清道南部の動きが東学上層幹部によっておしとどめられたいきさつがあったのだが、ここに至ってぬきさしならぬ内部対立として立ち現れることとなった。教主崔時亨は、「道をもって乱を起すことはよからぬことである。湖南の全臻準と湖西の徐璋玉は国家の逆賊、師門の乱賊である。われわれは速やかに結束してこれを攻撃しよう」(20)という通文を回し、「伐南旗」を掲げさせて北接の各包に全臻準らを討たせようとさえした。吳知泳は調停役として南・北接間を奔走し、崔時亨も次第に高まる北接内部の決起要求の声を無視できぬようになり、忠清道青山で集会を開くことにした。崔時亨は、「人心則ち天心であり、これは天運の致すところである。故に汝らは道衆を動員して全臻準と協力し、以って師冤を直し、すすんでわが道の大願を実現せよ」(21)というメッセージとともに孫秉熙に北接の各包を統率するよう指示した。この呼びかけに応じて忠清道の各地で蜂起が見られ、そのうちの一部は全臻準ひきいる湖南軍と合流するために孫秉熙の指揮のもとに公州方面に南下した。全羅道参礼に陣を布いていた全臻準の農民軍も北上を始め、忠清道の首府公州をめぐるって炎は今にも燃えたぎろうとしていた。

この時、湖南・湖西・嶺南「慶尚道」・江原・京畿各道の東学軍の大部分が、一カ所に集合したわけである。恩津・論山を中心

に、礪山・魯城・公州・連山・扶余・石城・益山・咸悅・竜安・韓山・舒川・林川・鴻山などの諸邑は、数百万「？」の東学軍によって、人の山、人の海をなし、旗・のぼり・剣・槍は数百朝鮮里にわたる山河をうめつくし、鉄砲と鼓笛の音は天地を振動させたのであった(22)。

当時、忠清道および全羅道で蜂起した農民は十万とも二十万ともいわれるが、公州戦闘に参加した農民軍の主力は、全臻準に率いられた四千名を中心とする一万余名の湖南農民軍であった。それに北接軍が合流し、さらに広範な層からの参加が見られ、甚だしくは日清戦争に敗れた清軍の敗残兵五百名までが農民軍に加わったという(23)。現在では、公州戦闘に加わった農民軍の数は、湖南軍一万名を中心とするほぼ二万名とされている。これに対する公州防衛陣は、日本軍精鋭部隊約千名に政府軍(中央から派遣された三千五百名と地方兵)一万名とされている(24)。

近代兵器に身を固めた日本軍に対し、農民軍が頼りにできるのは内から沸き起こる神聖な力だけであった。当時の戦争に参加した東学の一接主は次のように語っている。

しばらくたつて向うの山を見ると、日光に閃めくのが官軍の刀の光ではないでしょうか……そうだとすると数十万名を連れて逃げることができないし、立って戦うこともできない情勢困難でありました。逃げて戦っても死ぬのは同じだと眼をびたと閉じて戦

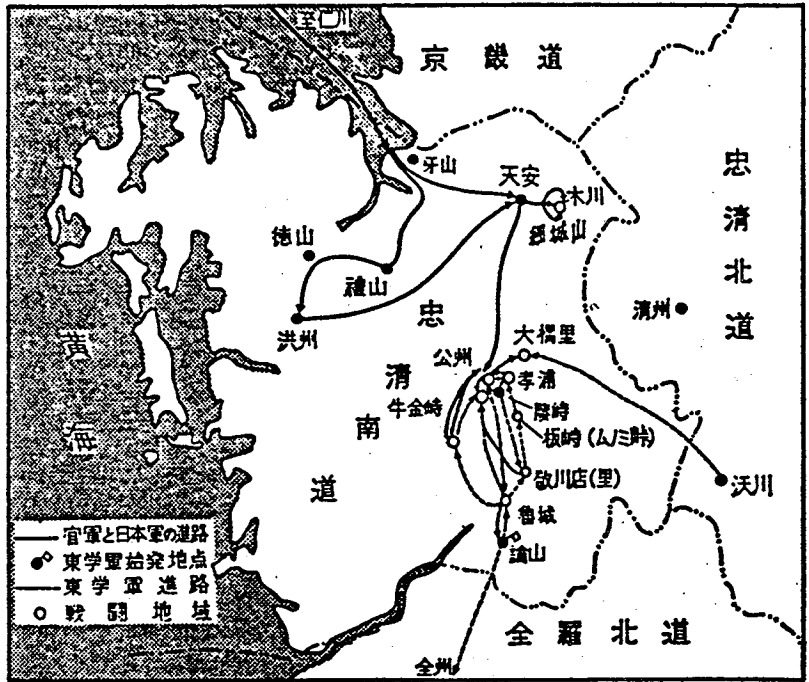


図2 公州付近の戦闘図（呉知泳、前掲書、218頁より）

おうと約束し、一斉に叫びながら四面八方に波のように討って行きました。どうなったか知らないが、いつの間にかわれわれは已に官軍の死体の上に乗って、彼らの刀を取り換えていました（25）。

当時いたる所で見られたであろうこうした光景は、今日ほとんどその記録をとどめてはいないし、そもそもそうした光景を再現し得る適切な言葉などないと言うべきなのだが、ともかく概略的に戦闘の過程を追って行くほかはないだろう。

公州戦闘の前哨戦は、十一月十八日、ソウルと公州をつなぐ中間の要衝である木川細城山で行われ、政府軍と日本軍に奇襲された農民軍はほとんど壊滅した。

農民軍は十一月十九日から第一次公州攻撃を開始し、公州の前哨基地利仁を連日攻撃し、二十二日に至るまで大橋・熊峙・孝浦で激戦が展開されたが、政府軍と日本軍は近代兵器による集中射撃と巧みな戦術で、農民軍を敬川店まで後退させた。

十二月四日に農民軍による第二次攻撃が、板峙戦闘より開始された。農民軍は政府軍と日本軍を公州直前の牛金峙まで追いつめ、この高地をめぐる近代兵器と決死の肉弾との激戦が七日間に四、五十回にわたって繰り返された。この時の農民軍の戦いぶりのすさまじさは、政府軍側の記録にさえはつきりと記されている。

ああかれら匪類幾万の衆、四五十里にわたって包围し、路あれば奪い合い、高峯あれば占拠しあい、声東に起れば西に趨り、閃き左すればたちまち右する。旗を揮い鼓を打ち、死を喜びて先登し、その義理、その胆略を語るに骨おののき、心寒し<sup>26</sup>。

こうした肉弾戦で多くの死傷者を出しながら、農民軍は論山まで退

却せざるを得なかったが、その時にはわずか五百名しか残った者は  
いなかったという。全州占拠の時と同様、もう言うまでもないが、  
主力軍勢を一点に集中させた農民軍の依拠したプログラムは戦略で  
はない。孫和中は全羅道羅州に、金開南は全州に留まってこの公州  
戦闘には参加しておらず、またこの時期各地で分散的な蜂起が見ら  
れた。もはや一人の英雄の指導力が統制できる限度をはるかに超え  
て「熱狂」は自己運動を始めており、日本軍の介入はそうした過剰  
な「場所」がもつ極めて「否定的」な側面をあげばだすことになっ  
てしまった。

全瑛準の要請にしたがって遅まきながら金開南は、五千余名の農  
民軍を率いて全州から忠清道清州に向かったが敗北し、また全瑛準  
は、全州から泰仁に後退しながら反撃態勢を準備し、急遽集めた八  
千余名の農民軍を率いて十二月二十一日、ここを最後と決死戦を展  
開したが、二二〇名の政府軍と四十名の日本軍の前にあえなく破れ、  
この後は翌年の一月まで続けられる政府軍と日本軍の掃討戦によっ  
て、全羅道西南端に至るまで全羅道一帯の村々はなめ尽くされるこ  
とになる。

甲午の年十二月「旧曆」以降、朝鮮南部は官軍と日本軍の天地  
となってしまった。洞屋「村落」ごとに殺気が天を衝き、流血が  
地にあふれた。このころ、朝鮮人の思想はまたしても、二つに分  
かれていたことを示した。一方には、官吏・両班・金持ち・儒林  
・小吏・使卒と西学派がすべて政党に変身して官兵・日本兵と

いっしょになり、「守城軍」とか「民包軍」のようなものを組織  
して東学軍狩りにとびまわり、その他の百姓たちは東学軍の側に  
同情を寄せていた。官吏・両班・小吏・使卒連中のうちで「東学  
党」に参加していた者たちは、一朝にして豹変して、逆に「東学  
党」の仇敵となった(27)。

熱狂はあらゆる世俗的な対立を溶解し、一体化された膨大な力を  
生み出すが、挫折の窮みに追いつめられるとほとんど自己破壊的と  
までいえるほどの衝動に身を委ねてしまうことは、さまざまな歴史  
が教えるところである。あらゆる人間を一体化する熱狂も、血に呪  
われた対立葛藤も同じコインの裏表の関係にあるのだから、そこに  
見られる残虐さや背信行為を評価するときには常に留保を伴わ  
なければならぬであろう。しかも、その作業は、そうした事件を  
過去のものとして追いやってしまうことではなく、「現在」の生々  
しい問題として生きることにはかならないであろう。

事実、千年王国主義は、単なる原初的イデオロギアな過去の情念的な残存物  
ではけっしてない。それは、極度に有効な現象であって、近代の  
社会的政治的運動がその影響の幅を広げるのに大きな力となるば  
かりか、その主義主張を影響下にある民衆の中にしみ込ませるの  
にも非常に効果的なものである。……千年王国主義は、人間  
の運命について関心を払う者ならだれでも動かされずにいないし、  
将来においてもつねに動かさずにいない性質の運動にちがいない。

だが、……それはまたつねに敗れ去る運命にある運動でもあるだろう。

しかしながら、それが近代の運動に偉大な活力として継承されてゆくならば、千年王国主義は、政治的な効果をもつだけではなく、それはかの熱狂、新しい世界へと燃え上がる確信、最も原始的でそれがゆえに民衆の間では最も強力な浸透性のある形態においても特徴となっている感情表現のあの大胆な率直さといった要素を失うことなしに存続しうるのである<sup>(28)</sup>。

農民軍が蜂起する以前、一八八〇年ころから、忠清道南部と全羅道北部を中心に次のような童謡がはやりはじめ、女たちや子供たちの口ずさみとなつては時代や地域を越えて広まっていた。

鳥よ 鳥よ 青鳥よ

緑豆の鳥に 下り立つな

緑豆の花が ホロホロ散れば

青舗売りの婆さん 泣いて行く<sup>(29)</sup>

「青舗」とは豆でつくる寒天状の菓子のことであるが、全瑛準が幼少期より緑豆(チビ)という愛称をもっていたため、この歌は全瑛準のことを歌った一種の予言として、戦争時から今日に至るまで親しく歌い続けられている。だが、この歌は単に全瑛準の偉大さや悲劇だけを歌いあげたものではなく、畏怖の念のようなものも含ん

でいる。そのことは、戦争前後に全羅道を中心に歌われていた次の歌によりはっきりとあらわれている。

鳥よ 鳥よ 青鳥よ

緑豆の枝に 下り立つな

緑豆の梢が ちよつと揺れりや

命落すを 知りやすまい<sup>(30)</sup>

この歌の大意は、農民軍に加担して憂き目を見るなということであり、当時の農民たちはこうした歌を口ずさみながら、現在想像するよりはるかに深い淵を覗き込んでいたに違いない。

一八九四年もおしせまった十二月の末、再挙を期して避身していた全瑛準はついに逮捕され、孫和中らとともにソウルで処刑され、金開南も全州でさらし首となった。全瑛準は次のような辞世の歌をのこしている。

時運来りしときは 天地をあげて力を同じくせしに／運が去れば  
英雄も自ら謀るなし／愛民と正義 我れに過失があるうか／国お  
もう赤い心を 誰が知る<sup>(31)</sup>

古阜民乱より農民軍の敗走までのおよそ一年間にわたる大変動もここにひとまず終りを告げるのであるが、討ち死にした農民たち、あるいは日本軍や政府軍によって殺戮された一般民衆や、焼き払われ

掠奪された莫大な家財について、今日ほとんど知るよしもない。

#### 四、結論

直接観察する機会がほとんど望めず、一貫性よりもむしろ荒唐無稽さがきわだつた社会現象を前にしたとき、人はその過激さに封印を押し、見慣れた表情に仕立て上げてしまふ傾向がある。社会的不安や貧困、搾取といった諸条件を英雄的革命行為の出現にただちに結び付けてためらわない抽象性は、「民衆」に味方するそぶりを匂わせながらも、その実、長い歴史を通じて「慣習と社会的慣行によって形成され、かつ維持されていた」<sup>(32)</sup>農民の日常生活から戦争という非日常的行為へと飛躍するためにはいかなる深淵が乗り越えられる必要があつたのかという根本的問いに対して、いかにも貧しい想像力で「現実性」を欠いた台詞を口にするこゝろしかできない。ここに結論めいたものをつけ加えるにあたり目的とするところは、そのような抽象性を排し、一九八四年の出来事がいかなる特性によって色づけられ構成された「現実」であつたかを現象学的・解釈学的により明確にすることである。

そこでまず強調されるべき点は、革命や戦争に見られる「現実」が、いわゆる日常的「現実」と著しく性質を異にしているという認識である。沸騰する熱狂の只中であつては、歴史学者が説明の手がかりとする階級対立や宗教対政治といった静態的カテゴリーはほとんど意味をなさず、まったく別種の原理に立脚した運動が見られ

る。たとえば、甲午農民戦争が始まって以来、東学のありようも大きく変貌し、「平時に比べると特異に感じられる点が多かつた」と、教団内部にいた者の眼から吳知泳は述べている。

第一に、布徳についての儀式を頻繁に行ない、そこでは一度に十人あるいは百人以上という大勢の人々が東学の道に入つた。そのなかには富豪・両班も多く、そのなかにはかつての過を悔悟した者も多かつたが、一方東学に名をかりようとする機会主義者も多かつた。そして名をかりようとする者のなかには、浮浪者・強盗連中まで含まれていたが、みな入信を認められて一度になだれこんできた。……また軍隊においては、あまりに人数がふえたので、規律が整わず、身中に虫を生じて、陰謀・間謀・通敵のような弊害も絶無ではなかつた。当時のそのような状況のために、すべての悪弊を一切厳禁しとおすことはできなくなつた。たんに臨時的に道に入つた者ばかりでなく、いわゆる「永年の道人」と称する者のなかにさえ、その本来の志を失つて無頼な連中に合流する者もなくはなかつた<sup>(33)</sup>。

ここには明らかに日常的世界から飛躍し、まったく別の原理をもつ「場所」の特異性が、たとえこの著者がそれを否定的な態度で回顧しているとしても、否定しようのない事実として語られている。もしこうした特異な「現実」を日常的な常識で割り切つてしまひ、甲午農民戦争を扱つてきた歴史学者の多くがそうするように、エン



ゲルス流の教条主義を楯にその「本質」を階級闘争に還元し、東学の役割を「宗教的外皮」と決めつけるならば、「現実」の理解は遠ざかるばかりであろう。

むしろ、日常的な常識に基礎づけられた合理的判断にとつて、戦争や革命といった非日常的な営為は理不尽で不必要な蕩尽であるに違いない。それは生命を賭した消費であり、着実な計算に支えられた生産行為ではない。わずかな財も自己保存本能もなげうって、つかの間の栄光のためにあらゆる余剰を生み出し、蕩尽する「非合理」な破壊行為である。にもかかわらず、人間はあらゆる危険も悲惨もかえりみず、利那的な熱狂に陶醉する。そういう意味で、戦争や革命は、祭りと非常に近い次元の「現実」を構成する。こうした「現実の多元性」を歴史学者一般が認めていないというのでは決してない。たとえば、アナール派の歴史学者ベルセは、フランスの十六、七世紀における民衆蜂起を検討しながら、祭りと叛乱を象徴的に同一視している。

音響と光。まだ宇宙の威力の前で臆病で、明日のことが不安な、そんな人間が祭りの夢みるような瞬間に、耳も目も奪われ、そして安堵したのであり、そのような具合に、万事は進行した。武器のおそろしいほどの喧騒と爆発音のなかで、人間は自然を支配しているという一時的な幻想をもとめていたのである(34)。

さらにいうなら、革命や戦争の過程には、E. リーチが形式化し

た儀礼の構造と相似した特徴が認められる。そこには単に祝祭的な雰囲気を実現される局面だけでなく、厳粛な秩序と紀綱が支配する局面、さらに役割転倒(世俗的な身分関係が逆転すること)が見られる局面を加え、三つの示差的な位相からなる構造が認められる(35)。デュルケムの意味において、革命や戦争は「聖なる」領域に属する出来事であるといつてよい。しかし、無秩序が日常的世界まで押し流してしまわないよう入念に儀礼的枠組みが制度化されている祭りと違って、革命や戦争は「現実」の多元的バランスを支える聖と俗の弁証法自体を台無しにしかねない過激さをもっているのだから、それを祝祭の下位カテゴリーに位置づけるだけでは充分な理解とはいえない。そこにはもっと無軌道で切迫した「力」の奔流が見られるのであり、そうした過剰な力学圏を問うことなしに「革命的現実」の本質に迫ることは望めない。

ヴィクター・ターナーは、十九世紀初頭にメキシコで起こった「イダルゴの乱」を検討しながら、革命の力学圏に迫るためにフロイトの「一次過程」という概念を導入しているが、ここでの問題を考える上で多くの示唆が含まれていると見ることができ。ターナーは、革命的状况において心理的レベルとともに社会的なレベルにおいても観察される一次過程の噴出が、暴力性と創造性を兼ね備え、外見上発展の「必然性」をもつものであることに注目し、一次過程を確立された諸原理や諸規範の産物と見なしてはならないと主張する。

「むしろ、それは諸関係を知り、経験するための、より直接的で平等主義的な方法に対する深い人間的要求から発生するのである。…

…この理由により、一次過程は、確立された諸原理や諸価値に基礎を置く倫理的・法的な制裁の適用で行き過ぎを制限しようとする個人や集団をしばしば押し流す切迫性と運動量をもつ。一次過程にとらえられた人間は、地上に神の国を打ち建てようとのばせあがっており、この欲望に対する障害を表すと感じられるものならなんであれ、とりつかれたように除去し続けるのである」(36)。こうして革命の特異性を一次過程に求めたターナーは、さらに一步アナロジを推し進め、革命と伝染病との類似性に注意を促している。

一次過程は伝染病にいくらか似ている。どちらの過程も放っておけば自然の経過を辿り、軌道を完成させる傾向があるだろう。……もちろん、こう言ったからといって、革命が社会の病理に属することをほめかしているわけではない。……私は、革命や他のやむにやまれぬ社会運動のような一次過程は、それ自体の病因論<sup>エタイ、オロジ</sup>原因論と運動量をもつようであるし、構造・機能主義的な用語では適切に説明され得ないこと、さらに、そういった過程は、それにふさわしい徹底的な絶頂と終結に向かうゲシュタルト的な特徴をもつということを強調しているに過ぎない(37)。

こういったアナロジに頼るのであれ、一八九四年に朝鮮半島で起こった出来事には単一のテーマに還元できない相貌が入り乱れていたのであり、あらゆる議論はそうした特異性を認めるところから始められる必要がある。正義に燃えた者たちの整然とした行進、お

祭騒ぎ、奇跡を求めて群れ集まってくる雑多な層の融合、死を死とも思わない者たちの抑圧者に対する怒りの爆発、殺戮、自由と平等に対する激しい希求と独創的な宣言、絶え間ない逸脱と裏切り、背信、虐げられた者たちに対するやさしさ、世界に拡がっていく認識と友愛、野心と欲望——そこでは、人間が体現しうる最も尊厳な態度とともに最も卑劣な行為が併存し、破壊的な衝動とともに創造的な営為が見られ、人間は神にも悪魔にもなりうるのである。そこでは、あらゆるものが横断的に交叉し拡散する過剰な生成、たえず自己自身を超出していく非方向的な過程が見られ、そうした「場所」を中心化しようとするあらゆる意志は裏切られ、その過程を形式化するあらゆる試みは挫折することになる。だからといって、そこに意味を問うことが無駄であるといっているわけではない。逆に、そうした「場所」は徹底的に意味<sup>メニ</sup>方向<sup>ン</sup>を欠いているが故に、最も豊饒な意味を生み出す源泉となつているというべきであり、「反封建的」、「反侵略的」といった歴史の意味を追求することももちろん可能である。また、この戦争を共時的に捉えた場合、そこに千年王国論的な意味を読み取ることも可能であったし、芸術・芸能に吸収されていった意味を問う作業も見逃せまい。

だがもうひとつ忘れてならないのは、ある意味を問う瞬間そこにいわば「ずわりの悪さ」が見られるという事実である。そうした「ずわりの悪さ」を「物語」に仕立て上げ隠蔽してしまふ強い傾向が見られる限りににおいて、あらゆる還元主義は斥けられねばならない(38)。たとえば、宗教と政治を対立する静態的カテゴリーとし、

一方に絶対的優位を与える二元論などその代表例といえるが、これまで見てきたように、東学を「宗教的外皮」として固定的に位置づけるよりは、超越的理想を設定することで実践を促す意味論的パラダイムや象徴的枠組みとして理解する方がより実情に近い。それは、俗的な存在としていったん「死に」、非日常的投企へとジャンプするための儀礼的変換の装置であった<sup>(39)</sup>。しかし、実際の戦争の過程にはより流動的で両義的な運動が認められる。それはまず、熱狂が主旋律となった「聖なる」境界状態であり、あらゆる差異を飲み込む同質的なエネルギー場であった。熱狂の只中であっては、「いわゆる民側とか、官側とか、儒道とか、東学とか、湖西とか、湖南とか、そういった倭小で狭量なことがどうして問題になろうか」<sup>(40)</sup>。同時にそれはまた、あらゆる逸脱や対立を、その最も過激な形で噴出するエネルギー場でもあった。こうした両義性ゆえに、戦争自体は行為者の視点によって無数の像が併存しうる錯綜した混線の意味場となる。甲午農民戦争を研究の対象とする者にしてみても、事情はさして変わらない。戦争の意味を決定する試みは、客観的諸条件に左右されるとともに、民族主義的歴史観、客観性や実証性を標榜する科学主義的偏見、世界システムを重視する巨視的位置づけ、心理主義的還元、比較文化的視点、人間性一般の探究を目的とするプログラムなど、解釈者の採用する（あるいは解釈者に埋め込まれた）理論的パラダイムによって規定されざるをえないのである。

甲午農民戦争で破れた農民軍は後の反日義兵運動の主力となり、

東学（天道教）は三・一運動でも重要な役割を果たす。甲午農民戦争が残した遺産には測りがたいものがあるが、そこに直線的な歴史法則を設定するのではなく、それぞれの出来事に固有の特性から出発し、しかもそれぞれに通底するものを探るといふ緻密な計測作業が必要とされようが、今ようやくその端緒にたどり着くことができ、たに過ぎない。

#### 注

- (1) 趙景達「甲午農民戦争指導者」全珠準『朝鮮史叢』第七号、青丘文庫、一九八三、四七―八頁、彼の父の死因と出自については諸説ある。
- (2) 伊藤博文編『秘書類纂 朝鮮交渉資料』中巻、秘書類纂刊行會、一九三六、三四五―六頁。原文はカナ混じり文。
- (3) 同、三四八頁
- (4) 吳知泳（梶村秀樹訳注）『東学史』、一九七〇、一七八頁
- (5) 田保橋潔「近代日鮮関係の研究」下巻、文化資料調査會、一九六四、二四六頁
- (6) 姜在彦「封建体制解体期の甲午農民戦争」『朝鮮近代史研究』日本評論社、一九七〇、一六九頁
- (7) 同、一九九―七〇頁、これは『韓国李年史』からの引用。ここで、「倭夷」とは日本、「権貴」とは特権階級のことであるが、「倭夷」を「洋夷」としている資料もある。（姜在彦「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争（2）」『歴史学研究』一七七号、一九五四、十四頁。「甲午農民戦争と東学思想」季刊三千里三二、一九八二、一〇六頁。）また、「済世安民」とは、列強の侵略に対する王国の秩序の立て直しを意味する言葉で、崔濟愚の「輔国安民」と対応していると思われる。
- (8) 吳知泳、前出、一八三頁
- (9) 同、二六九―七一頁。ここでは信義文が発表されたのは二月八日（旧

曆正月三日)となっており、古阜民乱の時点で発表されたことになっている(従って古阜民乱の勃発も旧曆正月三日となっている)。信義文の発表の日付については資料間でかなりの食い違いを見せている。例えば、田保橋潔、前掲書、二五〇―一頁では茂長襲撃の時点となっており、申國桂『近代朝鮮外交史研究』有信堂、一九六六、三一九―二〇頁では古阜民乱の時点となっている。前者は『東学乱記録』から引用し、後者は吳知泳から引用しているため、このくい違いは依拠する資料の違いによるものと思われる。尚、姜在彦の場合、「朝鮮における封建体制の解體と農民戦争」(2)一九五四、一三頁では吳知泳を引いて古阜民乱の時点で信義文が発表されたとしているが、『甲午農民戦争』、『岩波講座世界歴史 帝國主義時代』一九六九、三三〇―一頁、『封建体制解体期の甲午農民戦争』一九七〇、一七一頁では『東学乱記録』に依拠して茂長襲撃の時点を支持しており、また『甲午農民戦争と東学思想』一九八二、一〇五―六頁では引用先を明示せずにこの時点を白山集結時としているが、その間の変更についてはなんのコメントも加えられていない。ここではとりあえず、茂長襲撃の時点を支持しておくが、こうしたいい違いは他の場面でも度々見られ、それらに穿さくを加えることは最低限にとどめたい。

- (10) 吳知泳、同、一七一―二頁
- (11) 田保橋潔、前出、二五一頁
- (12) 吳知泳、前出、一八四頁
- (13) E. J. ホブズボーム(青木保編訳)『反抗の原初形態 千年王国主義と社会運動』中公新書、一九六一、一一〇頁
- (14) 信天清三郎『日本外交史I』毎日新聞社、一九七四、一六八頁
- (15) 吳知泳、前出、一九一―二頁。この弊政改革案は、本来二十七カ条あったとされ、例えば「各国の商人は各港で売買をすべきで、ソウルにはいって設市をしたり、各処に出て任意に行商すること勿るべし」などの条項も含まれていたらしいが、はっきりしたことはわかっていない。ここでは吳知泳の掲げる十二カ条を最大公約的なものとして引用しておく。(姜在彦『封建体制解体期の甲午農民戦争』一九七〇、一八

〇―四頁。朴宗根『甲午農民戦争(東学乱)における「全州和約」と「幣政改革案」』『歴史評論』一四〇号、一九六二を参照。尚、第十条の「日本人の部分は、日帝統治下で出版されたため、「〇〇」または「外賊」となっている。

- (16) 姜在彦『甲午農民戦争と東学思想』一九八二、一〇九頁
- (17) 吳知泳、前出、一九五―六頁
- (18) 村山智順『朝鮮の類似宗教』朝鮮総督府、一九三五、九三五―六頁
- (19) 吳知泳、前出、二二四頁
- (20) 同、二〇九頁
- (21) 姜在彦『封建体制解体期の甲午農民戦争』一九七〇、一九〇頁。李敦化編『天道教創建史』からの引用。
- (22) 吳知泳、前出、二二二頁
- (23) 同、二二二―六頁
- (24) 姜在彦『封建体制解体期の甲午農民戦争』一九七〇、一九二頁
- (25) 具良根『東学農民軍の戦闘経過の検討―第二次蜂起における日本軍との交戦を中心として―』『学術論文集』第五集、朝鮮奨学会、一四頁
- (26) 姜在彦『封建体制解体期の甲午農民戦争』一九七〇、一九五頁。『東学乱記録』からの引用。
- (27) 吳知泳、前出、二二七―八頁
- (28) ホブズボーム、前出、一一一―二頁
- (29) 金素雲訳編『朝鮮童謡選』岩波文庫、一九三三、四五頁
- (30) 同、四五頁
- (31) 姜在彦『甲午農民戦争と東学思想』一九八二、一一二頁
- (32) N. コーン(江河徹訳)『千年王国の追求』紀伊國屋書店、一九七八、四七頁
- (33) 吳知泳、前掲書、二二六―七頁
- (34) Y. I. M. ベルセ(井上章治監訳)『祭りと叛乱』新評論社、一九八〇、一七九頁
- (35) E. リーチ(青木保・井上兼行訳)『人類学再考』思索社、一九七八、二二二―三三頁参照

(36) V. Turner "Hidalgo: History as Social Drama", *Dramas, Fields and Metaphors — Symbolic Action in Human Society*, Cornell U.P., 1974, pp. 111

(37) *Ibid.*, pp. 111

(38) 日本語で書かれたものに限れば、甲午農民戦争に最も執拗に取り組んできたのは姜在彦であるが、彼は、日本の皇国史観から導き出された朝鮮の「他律性史観」に対抗するため、戦後の朝鮮史研究をリードし、「内在的發展論」にもとづく朝鮮史研究を切り拓いてきた潮流の代表格である(「糟谷憲一」近代の政治史「朝鮮史研究会編『新朝鮮史入門』龍溪書舎、一九八一、三二—四頁参照)。朝鮮史学者は、日本帝国主義に眩められてきた民族と国家の歴史を正当な地位まで復権させるため、朝鮮の歴史が「主体的」に「発展」することを「証明」する必要があったのであり、そのためには実証主義や歴史主義で身を固める必要があった。こうしたいまなつは率直な批判をためらわせるが、歴史家がそうした自己呪縛的な姿勢を堅持する限り、出来事の豊かな意味に到達することができないとすれば、この潮流もまた別のイデオロギーとして解放されるべきものといえよう。

(39) 「東学」や「東学覚」といったカテゴリーが、いかに「生きた」パラダイムとして朝鮮半島全域に通用し、人々を行動に駆り立てたかという問題を検討する資料として、たとえば当時朝鮮半島西北部の黄海道で宣教師活動を続けていた W. J. マッケンジーの書簡が残されており、参考になる。E. A. McCully, *A Corn of the Wheat of the Life of the Rev. W. J. McKenzie of Korea*, The Westminster, 1903, pp. 163—

98 参照

(40) 吳知泳、前出、二二—五頁